皇族のひとりごと

昭和52年1月24日　初版発行

《検印廃止》　© 1977 Printed in Japan

皇族のひとりごと

著者　三笠宮　寛　仁

印刷　株式会社堀内印刷所

製本　株式会社徳住製本所

振替口座東京2639番
電話東京(263)0034番
東京都千代田区三崎町2-18-2

発行　株式会社　二見書房

＊定価はカバーに表示してあります

0095-770506-7339

皇族のひとりごと

三笠宮　寛仁　著

二見書房

まえがき

あるボートの知人の紹介で、二見書房の社長と編集者と、天プラ屋で会うことになった。何の話かと思ったら、本を書いて欲しいとのことだったが、二十五歳のときに四分の一世紀記念で重労働のすえ書いて、あとは五十歳でと思っていたので乗り気はなかった。また当初の向こうのいい分は、皇族について……とかいうことだったので、よけいやる気がなかったのだが、何度か交渉をしているうちに、随筆集なら私も気が楽だからやってもいいというところに落ちつき、この本になった。

ただ新しいものばかりでなく、ここ五年間に、いろいろな雑誌や新聞などにのせたもので、原稿が手元に残っているものも入れてある。全部書き終って何回か読みなおすと、非常に読みやすいのと、くどくどしているのや、この文章では、読者はそこの状景はわからないだろうなあというところもたくさんある。しかし、しょせんはアマチュアの書いたものであるので、かんべんしてもらいたい。

表紙や本文の切り絵は、我が身障友の会の発表会で、ヒョンなことから、車椅子に乗っている、たいらいさを（ペンネーム・阿素洛）という若者の切り絵が、いまだアマであるのにたいそうすばらしかったので、いくつか依頼することになった。

その時点では、まあ半分くらいたのんで、一冊目の本では私自身のイラストも入っているから、そんなところでと考えていたし、発表会での彼の切り絵は、かなり悲しげなトーンでまとまっていたから、彼にもっと明るいものと頼んでおいた。

十数点のモデルができあがったとき、一、二点を除いては、抜群な出来ばえであったので、すべて頼むことにし、編集者のたっての願いで、表紙もたのんでしまった。本文よりよほど見ばえのするさし絵となった。

帯にもあるように、身障に正しい理解をするよう、いつもいっている私にとってこの本が、下半身が悪いのにめげず、これほどのものをつくってくれた彼の表現の場として提供できたことは、大変うれしい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章
ぼくの生い立ち　10
トモさんの家族　36
柏　47
和歌　49

第二章
皇室典範　56
天皇制　59
えげれす王室のこと　64
皇族の扱い　78
エリザベス女王との一週間　82

皇族の自由と不自由　100
一人の皇族から見た警察　103
護衛官　107

第三章

私の英国留学記　116
第十一回冬季オリンピック札幌大会　133
私の諸国漫遊白書　140
グループ活動と若者のあり方　164
アイディアを生かせ！　168
福祉　171
身障友の会応援団で想うこと　178
福祉とお金　182
民間救助協会　186

沖縄海洋博世界海洋青少年大会　189
生まれて初めて深夜ＤＪをやってみて！　197

第四章

私とスキー　202
愛山渓　209
ボート　220
スポーツと運動　225
高校野球　229
近頃の若者たち　232
習慣　236
加仁湯　238
鴨猟　244

第五章
人間の違い　250
モハメド・アリ　257
日本一の仕立屋　259
人間のおそろしさを！　267
生き方のなかの努力　270

第六章
たいした問題ではないのかもしれないが！　274
マスコミと私　277
イヤなことイロイロ　282
信じられないこと　290

第七章
ヒゲについて　296

エゲレスの紅茶　300
ウイスキー　303
ウイスキーの奥さん〝シェリー〟　306
おしゃれについて　309
音楽　311
芸術　316
趣味について　320
お酒のはなし　326
ヒマゴ会　331
おいしい店　334
お茶　337
オンナの子　342
愛するとか恋するとかいうこと　352

第一章

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぼくの生い立ち

私は敗戦直後の昭和二十一年一月五日に、疎開先の葉山で生まれた。

当時は皇族もくそもなく、家のまわりに必死で畑を作って、トマト、キュウリ、イモのたぐいを毎日、私にくわせていたそうである。そのせいか前記三者はいまだに他の野菜より好物であるという珍現象をみせている。

私は二番目の子供であり、長男である。四歳になると、家が近く(当時の家は目黒駅と恵比須駅の中間にある長者丸というところ)であるという単純な理由と、姉の甯子(やすこ)が通っていたことから、白金の聖心女子学院の幼稚園に通うことになった。

私は、ともかく学校ぎらいというか勉強ぎらいであり、幼稚園のときも、さんざん行くのをいやがったらしい。しかし、当時はまだ珍しかったココアを飲ませると、イヤイヤながらもダマされて通園したそうである。幼稚園では、今は亡きマザー吉川と久保田先生というとてもいいお二人にめ

んどうをみていただいたが、それでも、正面玄関の前に寝ころび、戸を足ゲにしては、入るのをこばんだり、しょっちゅうおもらしをしたりしていたようである。

この当時のことで、いまだに不思議なことの一つは、当時の園内の友人が、マッコ・シュバリエというフランス人であったことである。いま彼の消息はかいもくわからないが、ともかく、シュバリエ君とトモさんはいつも一緒に行動していたそうだ。

はじめての共同生活がフランス人で、最後の学園生活が、オックスフォード大でのイギリス人（フランス人の親友もいた）であったわけで、外人ではじまり外人に終ったという妙チクリンな学生生活であった。

六歳のとき、当時は珍しかった試験を受けて学習院の初等科に入学した。私が在学していたために（できるだけ多くの生徒とまじわらせる意味で）二年ごとに組替えがあった。

そのころの私は、きわめつきの弱虫であり、いわゆるガキ大将などではあるべくもなかった。学習院初等科の先生方のなかには、親父を教えたなどという方々もおられたほどだから、きわめて扱いが丁重かつ昔風で、私のための特別昇降口があり、特別室で土足からゴム靴にはきかえ、授業終了後も、そこで我が家の自動車の迎えを待つという、考えられないことをしていたし、私の呼び名も、先生はじめ全員が「宮様」であった。

いつか、あれはたしか五年生のときと思うが、私の友人で、いたずらっ子の一人が、何げなく、「トモチャン」と私に呼びかけたら、先生がえらい勢いで怒っていたのを、おぼろげながらおぼえている。

まあこんな感じのなかで毎日通学していたわけだが、どういうわけか私には奇妙なくせがあった。このくせは結局、中等科二年あたりまで続くのだが、国語などの時間、先生が作文を生徒に命じ、翌日、先生の指名であてられた生徒は、自分の席や教壇に立って自作の文を読んだりすることがよくあった。また他の課目でも、教科書を声をあげて読んだりすることがあった。

こういう際、まったくいまだにわけがわからないのだが、私にそれが当り、仕方なく読みはじめると、きまって泣きだしてしまうという奇癖があった。

これがなぜだかわからないから、先生も困ったろうし、また私自身も困りはてたものであった。いじめられて泣くならわかるし、また、ころんだりして痛ければ、これまた泣くのはよくわかる。

ただヒタスラ何かを読まされると泣きだすというのは理解に苦しむのだが、たぶん、しいて説明するならば、我が家と学校との往復のみで、家のまわりの悪童たちと遊んだこともなかったし、学校も特別扱いで、いわゆる友人たちとギャアギャアわめきあうことも、泥だらけになって遊ぶことも少なかったから、気ばかり小さくて、まわりを変に意識している弱虫が、急に、皆の注目をあびて、何かしゃべらねばならないとなると、かなしくなり、困りはてて涙が出てきてしまったのであろう。

この時代を知っている友人たち、また知らなくても現在は友人たちである連中にこの話をすると、現在の私自身があまりにも自意識過剰組合会長的であり、ズウズウしいことを知っているがゆえに、「フザケルナ！」とか「そんなことをいくらいっても考えられないよ！」とか「信じられないよ！」というたぐいの返答が多いのだが、この話はまぎれもない事実であった。

また、あるときは、同級生の一人と理由は忘れたが、ケンカをし、負けたのだが、その負けたことに、カッときて、五時間目(ケンカは昼休み中)のはじまる前に、我が家へ帰ってしまった。普通の人が我が家に帰る場合は、どうということもないが、当時の私は車での送迎ばかりのころであったから、電車、バス等に乗る方法もわからなければ、だいたいお金などもっていなかったし、ただヒタスラ、いつも朝と午後に通る車のコースどおりにふてくさって歩いて家までいったものである。四谷の初等科から、長者丸の我が家までだから、かなり時間がかかったと思うが、ともかく帰ってしまった。五時間目の授業開始後、私のいないのに気がついた先生はじめ生徒たちは上を下への大騒ぎとなり、校内全域を捜すために、全校授業が中止になったとかならないとか、大変な騒ぎであったらしい。

こんなところにも、負けは負けといさぎよく認められない小心な気持と、頭にくれば、勝手な行動をとるわがままさがありありと出ているが、当時は、結局、いわゆる共同生活のなかの一人であるとか、団体のなかの一人の行動といったものが、よくわからなかったのであろう。

こんなふうにして、初等科六年を終え、中等科に入った。他校からもたくさん編入してきて、学習院中等科の伝統である荒々しさが周囲に広がり、かつまた私もまわりと同じように電車通学をはじめ、おこづかいを持ち……と、普通にふるまいはじめ、徐々に奇癖も影をひそめつつはあった。が、それでも、まだ生徒のなかでめだつような存在ではさらさらなく、奇癖のほうも二年終了時ぐらいまでは、延々と続いていたような気がする。

ただ当時は、いくらなんでも長ズボンをはき、ランドセルからカバンになった中学生であり、大人っぽくなりつつあった時代だから、毎日毎日、登校する際、目白(中等科以後は目白にある)駅で、「今日は失敗をすまい！」とか「今日は絶対泣くまい！」などと、いま考えれば馬鹿馬鹿しいことを真剣に自分にいいきかせては学校の門をくぐったものである。

毎日毎日ということは、いいきかせてもいいきかせてもその都度泣いてしまったり、何か気の弱い行動をとってしまったりするからであった。男のくせに自分の持つおかしなくせが、どうにもたまらなかったし、中学生ながら、男とはもっと強いものという気持が強かったから、必死に毎朝心にいいきかせては登校したわけである。

中等科に入って、わがオフクロが何をいったかというと、それまでの意志薄弱な私を考えたうえでの意見かどうかはわからないけれども、とにかく男らしいスポーツをやってみろということをよくいったものだ。オフクロ自身は運動神経皆無の女であることが明白なのだが、そうだったからあえていったのか、あるいはまた、自分はともかくとして、男というものは男らしくスポーツに若さをぶつけるものだという気持があったかどうかは知らない。

ラグビー部かサッカー部のような男らしい部に入れといわれた記憶がある。テニスとかピンポンとかは女もまたするスポーツであるから、あまりよくはないというような雰囲気があったことは事実であった。少なくとも私はそういうふうに感じていた。

ともかく中学の三年になったころには、私もまともになったようだ。

そうかといって全校のなかでめだつ存在では全然なかったし、友人たちもおとなしいのが多かっ

たと思う。学習院の中等科は、代々、不思議な伝統があり、ともかくムチャクチャに言葉づかいが乱暴になり行動も粗野になる。

どこの中学校も同じかもしれないが、中等科高学年のころはちょうど大人っぽくなる時期であり、あらゆる大人の世界への好奇心を持ちはじめるころであろうから、皆いっぱしにヤクザな口調で、ゴタゴタいいはじめるのかもしれないが、とにかくどの学生の親も息子たちの口の悪さに閉口する時期である。

このようなまわりの風潮に少しずつ影響されたこともあろうし、また初等科時代には全然組が違っていた悪タレ連中と中等科以後に組が同じになったりしたことなどもあり、だんだんまともにいっぱしのことをいうように変化していったようである。

高等科のころになると、今まで教師から怒られたことのなかった男が、やおら怒られはじめた。教師をからかったり無視したり、また勉強をしなかったり、さらにはタバコを未成年のくせに吸ったのをみつかったりという、いわゆる極道者のはしりの徴候を呈しはじめたからであった。

当時、私は高等科の一大祭典である、教育大附属高等学校との定期戦（戦前より続いている両校の運動部対抗戦で、学生同士の完全な自治にまかされていた。両校より実行委員を選出し、企画、運営、遂行のすべてが学生の手にゆだねられているという特徴がある。また運動各部にとってはその年最大の行事であった）の応援団に属していた。

応援団といえば、だいたいの想像はつくと思うが、われわれもまた学習院独特のツメエリ、ジャ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com